

## 文学を通じて問い直す、自分自身の立ち位置

小平麻衣子

文学部国文学専攻 教授

日本近代文学について、研究発表や、時には文学散歩も行う13人の研究会です。言葉を通して、自分が拠って立つ近代的制度を問い直します。

日本近代文学——読めば意味がわかるものを、わざわざ勉強するとはどういうことなのでしょう。

ゼミでは、毎週各自の研究対象について、研究発表とディスカッションを行っています。夏目漱石や谷崎潤一郎をはじめ、夢野久作や江戸川乱歩といったミステリー、ジャズと文学といった文化論など、さまざまですが、単にマニアックさを競っているわけではありません。

文学研究も、鑑賞すれば事足りるのではなく、何かを明らかにする学問であるのは、言うまでもありません。ただ、その「何か」がわかりにくいのは、常に「何か」に対する評価自体を問題化しているからです。例えば文学史も、極端に言えば、どういう作品が新たに入り、どれが外れるのかは、その時々々の社会的な価値基準の推移に従って、動き続けています。研究の歴史が蓄積されれば、意味が解明され、作家の本当の意図や真理に近づく、というイメージはありません。

しかも近代の資料は、戦火や災害による消失もあるものの、多くの場合、既に膨大な量が目の前に存在しています。新発見とは、どこかに埋もれているものを発掘するというよりは、明らかに読めるものから、特定の意味を浮上させる取捨選択の行為になります。その際に問われるのは、人間を、時代を、どのように捉えたいのかという、考える人自身の思考の枠組みです。

文学はわれわれの生活のどのようなことでも描いてしまうので、読むためには、生かじりであっても、経済状況や教育制度、出版事情やセクシヤリテイなど、広い領域に触れざるを得ません。われわれは、毎回の迂遠な作業を通して、自身の思考が何によって形作られてきたのか、今も続けているその囚われから、どのように思考を更新していけるのかを問い続けています。

一人で読み、皆で読み、また一人で読む。言葉を通して紡がれる関係の広がり、ひそかに楽しいゼミです。

### あいる 隘路を行く

ほそやあやこ 細谷綾子君 文学部国文学専攻4年

私たちは、明治期から戦後までの日本近代文学の研究を行っています。近代文学作品は、読者に漢文や古文の高度な知識を要求しません。言文一致体で書かれた作品が多く、ひとつの作品を通読することは比較的容易です。しかしその寛容な顔とは裏腹に、時代と思想の理解を合言葉に初めて開く、閉ざされた世界を秘めています。小平ゼミの13人は、近代文学の安全な表向きの部分から、あえてほの暗い裏側に踏み込んで行こうとする「物好き」たちです。私たちの研究対象にはひとつとして同じものはありません。小平教授の親身なご指導のもと、それぞれ探求心を持って研究に打ち込み、日々熱い議論を展開して発見を共有しています。



# 建築デザインで社会との接点を築く

ホルヘ・アルマザン

理工学部システムデザイン工学科 准教授

建築デザインが社会においてどのような役割を果たすかについて、実践的手法により研究する。

私たちの研究室では、社会で生じるさまざまな問題の原因を解明し、そこから得られた知見を、人々の生活改善に役立てることを目的とした実践的手法である「アクションリサーチ」を用いて研究しています。

実際に私たちは昨年、山梨県市川三郷町で古い酒蔵をギャラリーに改修するプロジェクトを行いました。現地を訪れ、ワークショップを開いて地元の方から直接意見を伺い、小さなコミュニティの中で住民が楽しく利用することができるところとなるような手がかりを、「フィールドワーク」によって調べていきました。

また、横浜赤レンガ倉庫の広場に、自由に動かせる30台の机と120脚のイスを設置する社会実験も行いました。不要となった学校のイスを市民参加型のワークショップでカラフルに塗装し直し、にぎわいを生み出す仕掛けとして配置しました。その結果、単に人が通り過ぎるだけの場所となっていた広場で、冬の寒い時期でも多くの人々が

楽しむ光景を見ることができました。

こうして設計を行った後、その地域に生まれた新しい場がどのような変化を起こすのかを調べ、論文としてまとめることで、実際に作る際に生じた良い面と悪い面をどちらも分析でき、知見を共有することで今後の設計活動にも生かされます。

私たちの研究室では実際に社会と関わる「実践的研究」を重要視しています。研究室の卒業生は8割以上が組織設計事務所や建設会社の設計部、アトリエなどで建築系の仕事に就き、設計活動を行っています。日本では大学生と社会人を区別していますが、本研究室は社会と非常に密接なプロジェクトに取り組み、地域のコミュニティと協力したまちづくりなど、利益を考えると設計事務所では対応が難しい社会貢献活動も行っています。こうした活動を通じて、学生でも社会に積極的に関わる「社会人」になることで、卒業後に社会を良い方向へ導くようなデザインを考えてほしいと願っています。

## 研究室プロジェクトを通して

ながた あずさ  
永田 梓君 理工学研究科修士課程2年

私たちは研究室として実際のプロジェクトに参加しています。研究対象地の魅力や問題点を見つけ出し、利用者や地域の方の声を聞きながらデザインをします。その過程で先生をはじめ、研究室のメンバーと模型を作りながらディスカッションを重ねます。施工を考慮に入れて設計するため深く細かい知識が必要となり、参考資料を集め先生から指導を受けながら学びを深めています。外部の方とお話しする機会も多く、社会と触れ合う貴重な経験を積んでいます。近年は留学生も増え、日々刺激を受けています。研究室でさまざまな人とコミュニケーションを取りながら、設計することの面白さと難しさを学んでいます。

